

『狭衣物語』卷二 異本系本文の世界

— 伝民部卿局筆本と九条家旧蔵本の違いから —

今井久代
鵜飼祐江

一、はじめに

『狭衣物語』の異本系（片岡利博『異文の愉悅—狭衣物語本文研究』笠間書院、二〇〇三年）、第二系統（三谷栄一『狭衣物語の研究』〔伝本系統論編〕笠間書院、二〇〇一年。初出は一九三六年など）、第二種（中田剛直 校本）、と称される系統の本文は、卷二では、室町初期写の九条家旧蔵本（以下大島本）、鎌倉中期写の平瀬家蔵源氏物語竹河卷（平瀬本）のほか、零本であるが鎌倉初期写の伝民部卿局筆本（高野本）が現存する。高野本については影印が公刊（私家版「古典聚英」②）されているほか、中田剛直『校本 狭衣物語卷二』（桜楓社、一九七八年）に対校された形で翻刻が所収されている。

今回は、卷二の異本系本文の最善本とされる高野本と、大島本

との本文の異同を中心に、その本文の特徴を考察する。なお、高野本については『校本 狭衣物語卷二』の対校本文を参考にしつつ、影印から確認した。大島本は、三谷栄一『九条家旧蔵本狭衣物語と研究 上・中・下』の翻刻に拠り、私に校訂した。

二、卷二の最初の部分について

伝民部卿筆局本と大島本は、おおよそは似ているのであるが、特に巻の初めの方には、かなり大きな異同が見られる。大島本は深川本系本文である。一方で高野本は、巻一の慈鎮本や為家本と似たトーンや、巻一の内容と合致する表現がいくつも見られ、こちらが異本系本文であること、また現在では別の写本に痕跡を残すのみであるが、もとは同じ存在によって改変された本文であろうことが、推定される。以下見ていく。（私に校訂。見せ消ち部分は

削り、□は補入）引用本文は、I以下の通し番号を付した。

I かの下りし式^{くた}の大夫^{たいふ}の弟^{あに}の候^をは、進士^{しんし}の雑色^{ざしき}にてあるに、

兄^{あに}の藏人^{あざむ}になりていとまなくなりにし後は、御身^{あき}にそふかげにて、いつこの御歩^{あひ}きにもつかふまつりける。飛鳥井^{あすか}にもわざとあまたひき具し給はず、いとしのびつつ夜夜中^{よるよなか}とまどひ歩きつつ、兄^{あに}の大夫^{たいふ}などにもことに知らせざりけるなるべし。

大式^{たいしき}の乳母^{めのと}、道より、中納言^{ちゆうなごん}との、まいらせ「う」たる文^{ぶん}にも、「道成^{みちなり}が具して下り^{くだ}はべりし人、にはかに亡^なくなりはべれば、おもふ給へなげきて」などきこえさせたるを、「いみじく

かしづきて、ゐて下ると聞^ききは誰^{たれ}なん。あはれにも、はかなかりけるちぎりのほどかななき給に、雑色^{ざしき}道季^{みちすえ}参りて、

「あやしきことをこそ、うけたまはりつれ。道成^{みちなり}が妻^めの死^しにさふらひにけるを、くちをしうけ給はれば、海^{うみ}に身をなげて侍^{まへ}なる、乳母^{めのと}なる物の、言^いひ統^つけて泣^なきまどひけるさまなど、

ほの／＼^{（こぞ）}申^{まを}すをうけ給はれば、た、ゆくゑなき御事^{ごじ}にこそにて候へ。おもふたまへあはずれば、太秦^{うづまさ}にて尋ね失^なひてし人をなん聞^きき出^いでたる、語^{かた}り候しもいまこそあやしくおもふたまへらるな。殿^{との}おはしまし通^かふとはかけても知らずや候

けん」など聞^きこえさするを、げにさもやありけんなどおぼすにも、ひた道^{ちのま}に東路^{とうろ}におほしやりつるよりもいまずこしゆか

しくおぼつかなき方^{かた}さへそへて、さま／＼こそなげかれ給ひ「う」ける。（高野本Iウ3オ）

まず第一段落は、道成の弟が狭衣の飛鳥井のもとへの忍び歩きに付き従つていたこと、だが狭衣の忍び歩きは人数を絞つており、兄弟でも知らなかつたとの説明である。飛鳥井女君の行方を知る伏線、あるいは乳母子ながら道成が狭衣の忍び歩きに全く同行していない理由を明かす叙述であるが、大島本は深川本と同じ本文で、この他に、女君を見失つて悲嘆にくれる狭衣のために、飛鳥井の行方を知ろうと神仏に祈るなど、奔走する道季を語る。一方異本系（高野本）では、こうした脇筋の人物に必要な最低限の筆しか割かない。これは、乳母の思惑や威儀師の存在について、必要最低限の部分だけを叙述した、巻一の描き方と同じである。^{注1}

第二段落、飛鳥井女君の行方を知る場面。道成が連れて行った妻を誰とも知らぬままに、深い同情を寄せる狭衣を語る。唐突に思える反応であるが、道成下向に際し、狭衣が扇や衣装を贈っている（巻一）のをふまえての叙述なのだろう。大島本では、同情を寄せる堀河大殿のことは横で聞いているという形で、狭衣の心情としては語らない。一方異本系では、狭衣一人が歎いている形で、飛鳥井女君を見失つた折から、愛する女に死なれたという乳母子にも我知らず同情を寄せたという流れであろう。道成の妻

が実は求める飛鳥井であった、という皮肉な状況が効いている。

これは、天稚御子降臨時に、天人降臨とのみ聞いて慌てて参内した堀河大臣が、ひっそりとした宮中の様子に、狭衣は行ってしまつたと早合点して衝撃を受ける、という描き方に類しようか。読者と作中人物と、それぞれが知る情報が違う、その差を利用して、作中人物の独り合点を際立たせる描き方である。

注目すべきは傍線部分である。太秦で尋ね見失つた人の行方を、(最近)聞き出した、との意であるが、これは異本系のみ独自の展開を承けた叙述である。すなわち、流布本系深川本系では、太秦で道成は女君を見初め、乳母にもその旨そこで願ひ出ていたのだが、乳母は威儀師が居るので当初断つた、とする。ではいつから乳母は道成に女君を預けるのを決意したのか、東国に下向すると言つていた時に、道成のことは念頭になかつたのか、気になるところであるが、「東男も尋ね出でて往いなんとおとどくすなりけり」

(深川本、本文と頁は新編日本古典文学全集による。①二一八)とあるからには、狂言だつたとの描き方であろう。一方異本系は、「あさましき法師のにはかに惑はしてしかば、行く方かたなく思ひけるに」(翻刻は『狭衣物語諸本集成3 伝慈鎮本』笠間書院一九九五年。により、私に校訂する。以下慈鎮本と称す。61ウ)とあって、太秦参籠中に女君に出会つたものの、その身元等を知る前に行方知れ

ずになつてしまつた、ところが飛鳥井女君が懐妊したころ、偶然道中で、道成は太秦で見かけた桶洗童に出会い、やつと乳母に意中を伝え、身重の養君を連れて徒歩旅の東北行は困難と逡巡していた乳母は、道成のもとに女君を預けることを決意する、という展開である。高野本は、こうした異本系巻一の叙述を承ける内容となつている。ちなみに大島本(深川本も同)は、傍線部分は「太秦にて見し人になん、尋ね出でたる」と、どちらとも取れる曖昧な表現に後退している。

また、道成の連れて行つた妻というのが探し求めている飛鳥井女君らしいと知つた時の反応が、飛鳥井への愛情だけを語るあつさりした叙述になっているのも、巻一の異本系のトーンに似る。すなわち、異本系巻一は「東あづまへ行くべしと聞きしにも、いみじくこそ思ひ嘆きたりしか。うちたゆめて率あてて往いにけるにやあらむ、今はと心安く思ひけるもをこがましや。いづくへも我が心とよも行き離れじと見えし心ざまを、いかやうに思ひ構へて率あてて往いにけむ」(慈鎮本76オ)と、飛鳥井女君が東国へと、乳母に騙されて連れて行かれたのだらうと、不憫に思う狭衣のみを語る。ここには威儀師の記憶や、飛鳥井女君への疑いなどは存在せず、素直に飛鳥井を思う狭衣像が結ばれている。一方流布本系深川本系(特に深川本系)では、威儀師などを気にしてとつおいつする狭衣を描

く。このあたり、深川本系の本文に近い大島本でみてみよう。

i さもやありけん、知りながらも、「さやうの人はさこそあれ」とて言少ななる御気色なれば、いとほしくて、誠にしもあらざらんものゆゑ急ぎ申しつるも、いとほしかりけり。御心の中には、なかなか行方なく思ひつるより、心憂くもあるべきかな。一夜二夜にもあらず、さは言へどほど経にしを、さりとて誰とも知らぬやうはあらじを、太秦にて見そめて、乳母と心合はせたりしわざなるべし。さすがあざれて、さやうのわざもしつべくぞあるかし(三才)。かの祈りの師に取り返されたると思ひしは、なかなかよかりしを、ねたくもあさましくもかへすがへすあるべきかなと、いかでとくこのこと聞き定めむと、おぼつかなさもあさましきもまざりて思し嘆かるれど、この道季が前にては、そののちともかくものたまはざりけり。

(大島本3オウ)

この大島本(深川本)の叙述に比べ、異本系(高野本)の狭衣の反応は簡素である。妙な氣を回したりせず、素直に飛鳥井女君へ愛惜の念を向けている。これは女君の東国行きをどう受け止めていたか——女君を早く引き取らなかつた背景の描き方にも通じている。すなわち異本系の独自異文では、道成からの申し出を乳母が密かに承諾したあとで、「陸奥国出で立ち止まりぬる氣色なれば、

うれしう思ひなりて、この頃はすこし物思ひ慰めたるを、中納言も「さなめり」と見たまひて、心のどかにて晦日(つごもり)になりぬる」(慈鎮本62ウ)とある。「さなめり」とあり、狭衣は女君(少なくとも乳母)の東国下向を知っていたわけで、だが女君のようすがうれしげに変わったので、東国行きの危機は去つたと察し、狭衣も油断したとする。

異本系の描く狭衣の場合、女君に寄せる心情は他二系統に比べて素直でやさしいのだが、源氏の宮を諂め、周囲が望む生き方を選び取る「決断」を少しでも先送りしようとするがゆえに、決定的な失態を犯すことになる。東国行きを知りながらぐずぐずし、どうやら先送りできたらしいとなればほつとする、その優柔不断さがすべての悲劇の原因である。

なお、このあたりの狭衣の心境は、異本系独自異文では、「さすがにわが御心一つに人の上を思しはぐくむべき御心もまたなし。ここかしこにもてさまよはむも、さまあしかりぬべきことなれば、大式の乳母などにこそは言ひつけたまはめ、そも殿など聞かせたまひて、かかれば、女二の宮の御ことは否ぶるなりけりなど、まことしうぞ聞きなさせたまはむ。人知れぬ人の御耳にも、たはぶれにもさることは聞かれたてまつらじ」(慈鎮本60オ)と説明されている。狭衣は、自分一人の才覚では女君をどうしようもなく、

かといつて大式乳母などを頼れば父大臣の耳に入り、女二の宮との縁談に悩んだ理由はこれか、もう心配せずに「なべてならぬことに、また私の心苦しきも、さまざま育まむ、なんでうことかあらむ」(慈鎮本35ウ・36オ・独自異文)という堀河大臣の推奨する生き方通りに、「私の心苦しき」として愛する卑しい女を遇したと理解されるのを嫌い、一歩が踏み出せなかった。異本系が紡ぐ狭衣像は、こうした「源氏の宮とは結婚できない」現実から逃避し続けようとするモラトリアム青年として一貫する。そして、卷二の女二の宮の悲劇もここに連なるのは、言うまでもない。

一方で流布本系深川本系では、鍵を無くして門を開けられぬなどと嫌がらせをする乳母と、その乳母への反発から威儀師を思い出して嫌悪を覚え、女君に嫌味を言う狭衣が描かれる(ともに異本系にはない叙述)。源氏の宮に飛鳥井の存在を知られるのを恐れ、引き取りを逡巡する叙述は全系統に共通するのであるが、狭衣の威儀師の件へのこだわりや乳母の心理的駆け引きといったエピソードが詳述される分、流布本系深川本系では、これら強烈なキャラクターの印象が強く残る。女君に対する狭衣は、常に威儀師との関係を意識した、どこか冷めた態度となっており、検非違使別当の子息の藏人少将を、自ら騙る不誠実さも見せている。

I の高野本は異本系の巻一飛鳥井女君物語の狭衣像を受け継ぎ、

またiの大島本(深川本)は、流布本系深川本系の巻一の叙述を受け継いでいるのである。

三、他本との近接——縁談の進展

次に、狭衣の縁談に関わる場面である。ここの途中まで、大島本は深川本に非常に近い。その切り替わる箇所を通じ確認する。

II 大殿の御心いとありがたく心寛き御本上にて、さるべき折はこまやかなる御心しらひにて、おぼしよりあつかひきこえさせ給ければ、上の御前も猶この御うしるみには大将をおぼして、大臣の参り(まゐ)たまへるに、御物語りこまやかなるついでにも、この宮たちの御事などのたまはせて、「大将はものうきこと、見れど、さりともしらず顔に預けばえおるかにはもてなざし」などのたまはするを、うち／＼の御けしきのさしもみえぬにかくのみの給はせば、いかにつひに苦しく思ふ給はん、といとほしく苦しけれど、さもいかでかは奏したまはん。「なごてももの憂く思ふたまはん、ただよのわかき人も侍らず、いとうるはしき心にはべれば(4オ)、ただ御許しをまち侍にこそ。いつれの御かたにも、ながらへはべらんかぎりは、いかでか聞きはなち参らせん」など奏し給を、「さらばこの四月なりにもなかは」とのたまはするを、うけたまはり

たまひて、大將に「上のしかゝのたまらせつるを、さきくもうけひかれぬ気色とはみなからも、さもこそ奏せずなりぬれ。ほどもいと近くなりぬるを、思定めたまへる事なとあらば、いかに又おもひなげかれん(イウ)。いとこそ苦しけれ」とうちなげきたまへば、「思ふたまへ定むる事も侍らず。ただ今しげし、心やすきありさまにて、げに行く末のありさまにしたがひてこそは、など思ひたまふるを、大宮のいと許しがたき事にの給なれば、なにかとこそは思ふたまふれ」と申たまへば、「そこさおぼすとも、上の御心にこそあらめ。大宮も中宮の御かたざまをぞ許しがたくおぼさるらん。さらでは、なに事にかはあらぬ御心あらん」わが御子とおおぼされず(イオ)、日をへて気高くかたじけなき御さまなど見給にも、わが御身のくちをしくなりたまひにけんもあはれにおおぼさる、まゝにのたまふを、はかなき事も御心に少しも違ひて見え給へる、いかに罪得らんとあはれなる御けしきなれば、げにさらずとも思ふ心のつひになるべきにはあらねど、たちまちに定まりさへしなば、いとゝかぎりに思ひとぢむるになりぬべし、春宮に参り給はんまでは、かやうに何となきあり(イウ)さまにても過ぎつゝ、いまはかうにこそと見たまつり定めては、このよに跡もとゝめじと思はんには、何しにか御ためも

いとほしくうかりけるものと、いと心ゆかざらんも御心のうちもおぼしやらるゝ。御あらましことさへ心苦しくて、さらに思ひよられたたまはぬに、たちまちにはおぼしたちぬれば、いかさまにせんとおぼし敷きけり。(高野本3ウゝ6オ)
ii 殿の御心ありがたくひろくものしたまひて、さるべき折々などは、こまやかにあつかひきこえさせたまひけり。
帝はなほ二の宮の御後見には大將を、とのたまはせしかば、うちうちには、もしさやうにもやほのめかす、とおぼしめせど、音なければ、もしもの憂きことにや、とおぼしめせば、その後は御気色もなけれど、殿に御対面あるついでに、「かの笛の祿はすげなきなめりと見れど、世もいとほかなくのみおぼゆれば、頼もしき(イオ)人なかめるに、ありさまの心苦しきを、また誰にかは、と知らず顔にて、大將の朝臣に預けてんとなん思ふ」とのたまはするを、うちうちの御気色のもの憂げなるを見たまへば、いかなることにかと心苦しう思さるれど、かくまたまたのたまはするを、奏すべきやうのなければ、かしこまりて、「もの憂かなどにてはいかでか候はん。さやうにやばかりはうけたまひしかど、またまた仰せごとなきにとこそかしこまりてさぶらへ、これに過ぎたる面目(イウ)さぶらふべきやうなし、た(だ?)とく仰せごに從ひて申すべき

「⁵²なり」など申したまひければ、「さらば四月ばかりに」などぞのたまはするを、かへすがへす喜び申したまひながら、この御心ぞかひがひしからぬを、いかが思ひたまはんと、心苦しう思ひたまひけり。まかでたまひて大將君に、「しかしか上のたまはせつるを、さぎさぎもうけられぬ気色とは見ながらも、いかでかさは奏せんずると思ひつれば、さるべきさまに申しつるを、いかがはせん。少々心に入らぬことなりとも、なみなみの人にもあらばこそは聞き入れても過ぎさめ、いかにもかく召し寄せらるる「面目」の方もおろか⁶²ならず、ほどもなくなりぬなり、はや、さやうにも思ひ立ちたまへ」と聞こえたまふものから、もの憂からんことを、限りなき「面目」なりともさしも思はざらんを、かくすむるも心苦しうて、うちなげかれたまひぬる御気色の、例の人の親のやうにえ申したまはぬを、あはれに見たてまつりたまへば、「それよりまさりて何事のさぶらはんにか。物憂くも思ひたまへん、ただかく心にまかせてならひて、苦しきこともやと思ひたまへれば。いましばしもなどにこそ、かの大宮のあるまじきことにのたまふ⁶³なるさまぞ、むつかしくはべりぬべき」とのたまへば、「そは、高きいやしき、女はさぞ心もて立てたるやうなれど、上の御心にこそあらめ。大宮も中宮の御方さま

に、さらでもありぬべきにこそうとくもおぼさめ、さらでは「何事にかあらぬ御心もあらん」(点線以降異本系)

(大島本5オ〜7オ)

帝寵厚い中宮を意識し、血縁である源氏の宮やその養母堀河大臣に何となく疎遠になつてゐる皇太后宮方であるが、その葛藤を包むように堀河大臣の心寄せがある、と語る前段と、以下の女二の宮と狭衣との縁談の叙述とのつなぎ目を見てみよう。II高野本では、「已然形+ば」、両者を因果関係でつなぐが、II大島本では、別々の二文とする。高野本は、天皇が鍾愛の娘女二の宮を狭衣に、と考えるのは、狭衣が兄堀河大臣の息子であるから、と語る。堀河大臣と帝との、同母兄弟としての親愛関係を書き込むこの叙述は、天稚御子降臨場面での異本系の叙述の基調(今井久代、『狭衣物語』第二系統本文の特徴について―巻一 天稚御子降臨譚以前) (『東京女子大学紀要 論集第66巻(2号)』、二〇一六年三月)と通底しつつ、次の帝の縁談の持ち出し方とも響き合っている。「こまやかに」語るついでに、狭衣に預けたい、との帝の発言に至るのである。気が進まないのも察しているが、あの甥ならば、堀河大臣の子ならば、きちんと応じよう―その信頼感が、逡巡のない帝の発言から見て取れる。詳しく説得を展開する深川本系(大島本)の帝のそれとの大きな違いである。

これを聞かされる堀河大臣の心情も、高野本では、息子の反帝と帝の意思との板挟みで苦悩する姿として、簡潔に象られる。帝への奏上は、帝を傷つけぬよう、また息子の逡巡が受け容れられるよう、配慮の行き届いた内容で、「面目」を前面に押し出す深川本（大島本）とは対照的である。一方深川本（大島本）では、「面目」と恐縮しつつ縁談を承諾した堀河大臣は、堀河家の「面目」ゆえ女二の宮との縁談を進めよと狭衣に告げるのだが、通常の「面目」ならば狭衣の心を優先するのに、あえて強引なその父を「あはれ」に思い、狭衣は母宮が反対するので逡巡してただけだと、当たり障りのない言で答える、と描いてゆく。「面目」をキーワードに、天皇と堀河家は血縁関係にありながら、やはり主従なのだという描き方である。

これに対して高野本は、「思ひ」定む」がキーワードである。堀河大臣は、息子（狭衣）は不承知と思ひながら、弟（帝）にそうも言えず、四月に降嫁と決まる。狭衣に向かつては、日程は決まったが、そなたに思い「定」めた人が居るなら、どんなに帝は歎かれようかと嘆息する。すると狭衣は、私には思い「定」めた人など無い、逡巡するのは母宮を憚るゆえだと答える。この会話の間に心内語はない（深川本等との違い）が、「結局は帝の意向ゆえ、母宮の反対は気にせずに」との堀河大臣の返事のあと、堀河

大臣および狭衣の心内語となり（内容は異本系独自異文）、そこにも「定」が登場する。父大臣は、母宮に遠慮することはないと答えつつ、我が子ながら気高い狭衣に、自分が臣下に居るのを後悔する。明らかに不承知らしいのに、自分には特に定めた人などないと答えた狭衣の姿に、帝への遠慮を感じ、申し訳なく思ったものか。だが狭衣の方は、降下した自らを責める父―それは帝位を踏みたかつた無念の裏返しだ―を前に、父の思いに背く不孝の罪を思い、どうせ実らぬ源氏の宮への恋だから、と思う。この場で父大臣は自らの無念を語ってはいないが、「あはれにおぼさるゝ…あはれなる御けしき」と正しく狭衣は理解していて、日ごろの親子の親密さを物語っている。だがその矢先から、女二の宮との結婚という未来を「定」のに狭衣は尻込みし、このまま源氏の宮内まで待つてその後は遁世をと考える。つまり先の父大臣の歎きは、父大臣も気づかぬうちに、源氏の宮との未来（父や叔父と袂を分かつ未来）を「定」かどうかを聞く問いになっていたのである。そして狭衣は、女二の宮も源氏の宮も、どちらとの未来も「思ひ定」、決断することができない。肉親としての帝と堀河一家の親愛関係があり、またただ一人臣下に降つた父を思うゆえに、周囲に逆らつて源氏の宮に「定」め得ず、一方で狭衣個人の感情が、女二の宮に「定」ことを拒む。もとより時間は流れてゆくので

であり、決断からの逃げもまた一つの決断として、現況に吸収されるほかない。巻一の飛鳥井女君の悲劇も、要は引き取ると「定」（それは源氏の宮との決別の第一歩だ）め得ない逃避が招いた結末なのだった。ならばご降嫁「四月」決定をよそに、なおも心を「定」ことのできない狭衣の未来はどうなるのか。

高野本は、巻一の異本系本文（慈鎮本など）と連続する形で、王朝人らしい素直な優しさと（すき）心をもちつつ、自分の未来の「選択」から逃げる（それは即ち「定」む責任から逃げて、揺れる心のままに周囲を振り回すことだ）ゆえに、不幸を招き続ける主人公像を描いている。異本系本文の簡素な表現、また他本にない独自異文は、きちんとした意図によつて選び取られているのである。そして大島本もまた、最初こそ深川本に近い形を持ちつつも、このあたり以降は、高野本に近くなつてゆく。

四、小さな異同

以後高野本と大島本の本文は非常に似通つてくるが、多少の異同はある。次はそうした部分をみていく。高野本の本文をあげる。

Ⅲ 「いやや、世中にはありはつましき夢を見しかば、ながら
ふべき心地こちもせず、ものゝみ心細ほそくて、さやうの事もものごと思
たまへたゝれてぞ侍。あやしうとも、ながらへてつかうまつ

れとこそはおぼしめすらむに、霞かすまん空そらを形見かたみにては、何なに、
かはせさせ給はんと、行く末すゑを心苦くるしう思おもひわつらはれ侍を、
殿などはたゞかうかたじけなき御事にさへ、ものうげなりと
苛さいむこそわりなけれ」とて、涙なみだをさへうけたまへれば、まこ
とに、いかやうに心細ほそくおぼさるゝにか、と心苦くるしうて、わ
れも涙なみだは落ちぬ。「いかなれば、さのみはものごとおはしますに
か。かぎりなき御事といふとも、物うくおぼしめされば、殿
のさやうにも奏そうせさせ給へかし。大宮はあだなる御心の程を
ぞつねにうしろめたげにきこえさせ給めるを」言へば、「あだ
なりなど言ふばかりなる事こそおぼえぬ。もし、きのまろど
のを聞き違ちがへさせ給へるにや。この御事なども、かくあな
がちに行く末すゑまでたどらぬ人もありなんかし。法師ひやうしだに、かう
はええぬわぎにや、佛ほとけだにことこそは教おしへたまふめれ」
とのたまへば、うち笑わらひて（高野本20オ〜21ウ）

狭衣は偶然かいま見た女二の宮の美しさに心惹かれ、肉体関係を
持つてしまうのだが、そうと周囲に告げれば、直ちに女二の宮と
の結婚が決定する。それを嫌つて、女二の宮への後朝の歌を、仲
介する中納言典侍にはそうと知らせず贈ろうとする場面である。
傍線部分、大島本では「さやうの事もいかが」であり、この方が
王朝文学のことばづかいとしては馴染みがある。高野本の方は、

文脈から考えて「さやうの事も思ひたまへ絶たれてぞはべる」であろうが、「思ひ絶つ」は王朝文学には馴染みがなく、日国オンラインは「思ひたれぬ方の事をしも」（あさちが露 13C）を初出にあげる。書写時期の言語感覚の反映、あるいは既に改作期（12C前半）にも口語表現としては存在していたものか。深川本もそうだが、巻一の折には慈鎮本（異本系）にはしばしばこの種の、王朝文学には馴染みのない（解釈しにくい）表現があったことを付言しておく。狭衣は死を予感する身ゆえ、女二の宮との縁談は気乗りしないと力説する。続いて波線部分は、「法師でさえ、こう（女性を遠ざける）は耐え得ぬものか、佛は戒を教えなざる」ぐらいの意。ここを大島本は「法師だに力はあへぬわざにや、若無比丘と仏の切にいたしましたまへるよ。げにとこそ思ひあはせらるれ」とある。大意はほぼ同じだが、「（女性に仏法を説くは避けよ、里で乞食の際は比丘を伴え）若無比丘、一心念仏」という、女犯を戒める心得を説く、法華経安楽品を引く言である。この引用は流布本系深川本系に見られ、他本の影響が考えられよう。なお、巻一でも、しばしば仏典の一節が引かれる深川本系・流布本系と比べ、異本系は限定的（天稚御子の去った明け方の言のみ）であった。

IV すげなく参りて、「にはかにはいかにおぼしめさるゝぞ」な

どきこえさすれど、たゞ枕の下は、釣りするばかりになれいでさせ給て、いと心苦しきさまにぞもてなさせ給（24オ）。たゞさりけり、と心得はてつるにも、むげに知る人なくては、いかでかいらたまはんと、あやしうおぼゆ。●「けさ、大将殿の御文参らせよ、とてたまらせたりつるを、はしたなうやは」とてうち置くを、あるかなきかなる御心に、これさへ散りて宮の見給はんもいみじかるべければ、「かへしやりてよ」と言はまほしけれと、のこりなく言ひしらせつらむもいみじう恥づかしければ、さもえのたまはず。たゞいとしのびがたく、（24）せきわびたまへる御けしき、事はりなり。さばかり心ふかげなる御心ばへに、宮のたちまちにいかなりつることぞ、などおぼし騒がせ給つらん御けしきも、けにいかばかりかおぼしめさるらん、と心苦しきことかぎりなし。

（高野本24オ〜25オ）

●部に、大島本では「さらばまた、この文を我して参らせたまふべきことかは、などさまさま過つ心地のやうにおぼゆ」が入る。

この文がなくとも一応意は通じるが、「おぼゆ」の目移りによる脱落と見て良いのではないか。中納言典侍は、狭衣に手紙を託されて女二の宮の御前に参ると、宮はいかにも具合が悪そうである。どうなさいましたかと声をかけつつ観察するに思い至り、手引き

もなしに逢瀬があるものかと思ひ、(自分が手引きしたみたいで失策だという気がするが 大島本により補入) 託された手紙を渡さぬわけにも、と女二の宮にお目にかかる、といった流れになる。

女二の宮物語のすれ違いの一端を担う中納言典侍の、うすうす事情を察しながらも、不用意に踏み込むことで軋轢や責務が生ずるのを本能的に避けようとする、「めやすさ」を最優先する女房らしい価値観が活写される場面である。

続いて、傍線部は大島本になく「見たまはんは恥づかしけれど」とあるが、これも「いみじ」の目移りに関わって傍線部分が脱落したのではなからうか。狭衣の手紙に心揺れることなく、突き返したい衝動に駆られながら、そのようにはつきりと拒絶を主張できない、おっとりした宮の人柄をたどる。ここの自己主張の薄さと、後の、自ら食を絶つて体調を弱らせてゆき、出家も仕方ないと周囲に認めさせる際の意思の強さとが対照的である。換言すれば、このふだんの自己主張の弱さゆえに、いずれば天帝の意思通りに降嫁の運びになるはずとの周囲の油断も生ずるのである。

V 御とぶらひに大将参り給へるに、中納言典侍対面して、この峰の若松とありし御ひとり言を語りいでたるに、御顔もいとあかくなりて、あさましうあはれと思ひきこえさせ給へり。「心うく、今、で告げさせたまはりつらん。をのづから気色は

見給へつらんものを、かうと聞、きましかば、おのづからいとかうよそのものには為いたてま(53オ)つらざらましものを」
といとくちをしようおぼしたれば、
(高野本53オウ)

これも波線部分が大島本にないが、「ものを」の目移りの脱落であろう。大宮が老子を出産されるとの触れ込みで、狭衣もそうと信じ切っていたのが、実はあの時の逢瀬で女二の宮が懐妊し、御子が誕生したのだと知らされる。そうと知っていればと狭衣は恨む。狭衣の、女二の宮への愛情を思わせる場面である。

VI 「おのれつらくては侍事にこそ」とてもうち笑ひぬれど、まことに涙ぐみたまひて、いとあはれとおぼしたれば、「今はいとゞ大宮さへおはしまさで心細くなりまさらせ給にも、たゞこの四十九日だに果てなば、とこそは一日も(54オ)上はのたまはずめれば、つひにはたゞ同じ事にぞ見たてまつらせ給はん」と言ふを聞くは、ひとへにかゝるあはれにうつる方はなくて、「いでやさばかりなめく心づきなきものにおぼしつつみてかうも、てなさせたまへれば、今はいとゞさて見んともおぼしめさじ」とて、あなうれしなともおぼしの給はぬは、いかなるべき御仲にかとぞ見ゆる。
(高野本54オウ)

傍線部分は、大島本では「典侍うち笑ひて、『おのれつらくてと侍る』とぞきこゆれど、なほなほまめやかに涙ぐみて」とある箇

所。大島本の方が「典侍」と主語を明示する分わかりやすいが、待遇表現から推定できないこともない。興味深いのは高野本の「うち笑ひぬれど、」で、女二の宮と契つたのを黙っていたのに、女二の宮の懐妊を教えてくれなかった典侍が悪い（実際は典侍自身も大宮の懐妊と欺かれていた）、宮と会わせてくれれば気づいたのに、と無茶を言う狭衣に、自分が悪くてこんなことと言うのではないですか、と典侍は苦笑する。姉の養君である狭衣を典侍も大切に思っており、ゆえに出過ぎたからかい笑いもするが、本気で涙ぐむ狭衣をみると、帝も母宮の四十九日が過ぎれば女二の宮の降嫁のおつもりだから、と力づけずにはいられないのだ。

点線部、大島本では「一つにかかるあはれ^わそへる方もなくて」とあるが、意が通じにくい。こなれない表現であるが、高野本に従い、ひたすらにこのような（女二の宮への）思いに移る方もなくて」と解しておく。女二の宮との未来を決まったこととして言われると、にわか尻込みする狭衣の心理が、活写されている。

五、まとめ

女二の宮の縁談近辺まで、高野本の叙述は巻一の異本系の脈絡を受け継ぎ、同じ作者によって同時期に改作された本文と了解される。一方深川本系の本文となつている大島本と高野本とは、大きな違いがある。これ以後二者は概ね似た本文となるが、目移

りと思われる脱落が、高野本と大島本の双方に見られる。これについては、両者を見比べ補うことが必要であろう。また小さな文の違ひは何カ所も見られ、両者を比較吟味し本文を校訂する必要があるが、どちらかというが高野本の方が、巻一の異本系本文にも似た、こなれない言い回しながら主題を明確に紡ぐ叙述を残しているように思う。また、特に和歌に関しては、何箇所か、大変大きな異同が見られた。

冒頭から最初の方は、片方は他系統の本文とほぼ同一であること、しかしながら途中から両者似た本文となり、和歌以外は小さな異同にとどまることなど、高野本と大島本の関係は、巻一の慈鎮本と為家本の関係にとてもよく似ている。片岡利博は、巻一の為家本への流布本系本文の混入について、最初の何枚か分がなかったために、手元の他系統本文をそのまま移したかとする^{注2}、こうした書写態度といい、和歌は自由に変えられたらしいことといい、『狭衣物語』異本系の書写のあり方については、さまざまに想像をかきたてられるのである。

注

注1 今井久代『狭衣物語』異本系本文の世界―飛鳥井君物語を中心に―（『国語と国文学』二〇一七年十二月号）

注2 片岡利博『異文の愉悦』（笠間書院、二〇〇三年）
（いまい ひさよ 本学教授・うがい さちえ 本学特任研究員）